

銅 賞

汚れた水がきれいになるまで

内藤 倫太郎

筑後市立 羽犬塚小学校

僕は、社会科見学に矢部川浄化センターに行きました。

矢部川浄化センター（水きらら）で学んだ事は、浄化する水についてです。水きららには、三十四人の人が二十四時間交代しながら働いています。そんな水きららは、一日に一万二千七百立方メートルの水の水を使える水にしているそうです。

再生水というきれいな水になるには、下水道でポンプまでおくれ、ポンプから水きららまでおくれます。その後、沈砂池で、大きなゴミや土、砂を取りのぞきます。最初沈殿池で、小さなゴミを取りのぞきます。その後、反応タンクに流れ、そこには、活性汚泥という微生物がいて、汚れを食べてくれます。そして、その活性汚泥が死なないように空気を送りこんだり、ふえすぎたら活やくできなくなるので、少し取りのぞいたりします。その取りのぞいた活性汚泥は、セメントやひ料に使われます。そんな反応タンクをぬけると、最終沈殿池に行きます。最終沈殿池では、分かいして沈みやすくなった有機物を沈めて、しよりした水と汚水に分けます。そして、消毒せつびを通り、水しつけんさで、最後は、川に流していいか、人がたしかめます。そして、とうとう川に流されます。職員の方が、「油を水道に流さないでください。」と言っていました。その理由は、油に弱い活性汚泥が死んでしまうからだそうです。

このように水きららでは、いろいろ教えてもらいました。

このことから、小さなことでも大きな事になることや、むだ使いをしないと決めました。これからも、水の大切さを忘れないようにしたいと思います。